

首長への不満と再分配の魅力

ー 現代ポーンペイにおける最高首長の権威の相対化 ー 河野正治 (筑波大学大学院 人文社会科学研究所)

1. はじめに

本稿は、ミクロネシア・ポーンペイのウー首長国を事例に¹、最高首長に対する表敬と不満という住民の相反する態度に着目する。そして、なぜ住民が最高首長への不満を抱えながらも、最高首長を葬儀に招待するのかという問いを考察することを通して、現代ポーンペイにおいて首長制が再生産されることの一端を理解することに目的を置く。

首長制は、オセアニア研究の古典的な主題である。ミクロネシアにおける旧来の類型論では、清水昭俊により、集中的首長制と「同等者中の第一人者」的首長制という二類型が設定された。そのなかで、本稿の対象であるポーンペイは集中的首長制とされた。この集中的首長制は、最高首長 (paramount chief) という「絶対」的権威に基礎を置き、首長の権威を正当化する宗教的かつ世俗的イデオロギー²によって支えられている (清水 1989: 126-127)。

他方において、植民地統治から国家建設までの近代化の過程を経て、オセアニア諸社会における政治環境は変容してきた。現代のオセアニアの政治的な領域は「大統領や首相、国会議員、現地の法廷裁判官などによって新たに構成される一方で、多くの地域が『慣習的首長』 (custom chief) によって支配され続けている」 (Lindstrom and White 1997: 2) という状態である。すなわち、伝統的なエリートである首長と、近代的な国家エリートである政治家や役人といった複数の権威が共存する状況にある。したがって、首長の権威は、多様な権威のひとつに過ぎず、唯一の権威ではないことを視野に入れる必要がある³。

この点にもとづくくと、最高首長の権威についても、もはや「絶対」ではなく、近代化の過程で相対化されていることが想定される。この想定にもとづくならば、マーカスが述べるように、「首長の神秘化された性格や首長の威信に過度に依存する」ことをやめ、首長の権威が脱神秘化されていることを認めなくてはならないだろう (Marcus 1989: 196)。

ポーンペイにおいても、近代化の過程で新興の政治エリートが出現した結果、最高首長 (ナンマルキ) の権威の相対化がみられる。中山和芳によると、「ナンマルキたちは

1 本稿は、2009年5月から2010年2月までの延べ9ヶ月におよぶ現地調査にもとづいている。なお、本稿のポーンペイ語表記は、Rehg and Sohl (1979) に依拠している。

2 清水の整理にもとづくくと、ポーンペイの最高首長の権威は、人びとと神々を媒介する最高首長という宗教的イデオロギーと、首長と臣民の表敬的な相互行為を自然化する名誉と威信の世俗的イデオロギーに支えられている (清水 1989: 129-132)。

3 近代化の帰結として、経済的エリートなども権威を持ちうる。たとえば山本真鳥によると、サモアでは、都市化や海外移民の増加の結果、近代的職業に従事して村に現金をもたらす不在マタイ (首長位称号保持者) が増加している。在地マタイは、儀礼交換の必要から不在マタイを無視しえない (山本 1989)。

称号のシステムを『ビジネス』としているという批判が出はじめている。ナンマルキたちが〔中略〕品物や現金欲しさに称号を乱発することに、人びとは不満を感じ始めている」(中山 1994: 102-103)。不満の背景には、アメリカ統治期の1970年代以降に、民主主義的な選挙にもとづく政治エリートが出現したことがある(中山 1986)。最高首長がこうした新興エリートの富を、称号授与を通して自身の影響下に置こうとした結果、最高首長の強欲や吝嗇は表面化するようになった。すなわち、最高首長の権威が相対化された結果、最高首長に対する不満の顕在化する余地が生まれたと言える。

実際に筆者が行った調査においても、最高首長に対する不満や陰口が聞かれ、最高首長を意図的に排除する葬儀さえもみられた。ところが、最高首長の権威の相対化にもかかわらず、多くの住民は、葬儀2日目に最高首長を招待するという慣習的な実践を行っており、ポーンペイの首長制が再生産されるひとつの契機となっている。本稿では、この点に注目し、最高首長への不満の表出が著しい祭宴時の再分配に焦点を当て、なぜ人びとが不満を持ちながらも、最高首長を葬儀に招待し、結果として首長制を維持してしまうのかを検討する。

2. ポーンペイの首長制と称号制度の現在

ポーンペイ島は、ミクロネシアの東カロリン諸島に属し、北緯7度、東経158度に位置する火山島である。行政的には離島とともに、ミクロネシア連邦のポーンペイ州を形成する。2000年時点の総人口は32,395人である(Division of Statistics, Department of Economic Affairs 2002)。本章では、ポーンペイの首長制がいかなる形で存続しているのかをみていく。

2-1. 諸外国との接触における首長制の存続

ポーンペイは、スペイン(1885-1899年)、ドイツ(1899-1914年)、日本(1914-1945年)、アメリカ(1945-1986年)の4ヶ国からの統治を経た後、1986年にはミクロネシア連邦の一州として独立した。こうした諸外国の統治下⁴において、一方ではドイツ土地改革(1912年)をひとつの契機として最高首長の一次的土地権が否定され⁵、他方ではアメリカ信託統治期における民主主義の導入のもとで最高首長の議会政治への関与が限

4 ポーンペイを含む現在のミクロネシア連邦にあたる島々は、同一の政策にもとづく統治過程を経験したにもかかわらず、それに対するローカルな反応は多様であり、各地域の首長制は異なる変容を遂げた。たとえば、コスラエでは住民により首長制が廃止され、ヤップでは州憲法によって首長会議が規定され、首長制が州政府の一端を担っている(飯高 2002: 207; 則竹 2000)。

5 ドイツ統治以前には、最高首長が首長国内の全ての土地に対する一次的土地権を持っており、最高首長から二次的土地権を認められた母系リネージの長が居住と耕作の権利を得た。それに対して、ドイツ土地改革は、最高首長の一次的土地権を否定し、さらに土地の母系相続から父系相続への移行を促すものであった(清水 1999)。

定された⁶。だが、最高首長が政治経済的実権を失った後も、首長制は、称号 (*mwar*) と祭宴 (*kamadipw*) の実施から成る慣習 (*tiahk*) の領域で持続した (清水 1995: 53)。その帰結として、土地の支配を通して成立していた最高首長と住民の関係は、称号の管理を通して維持されるようになった。

さらに、アメリカ統治期には、新興の政治エリートの財力を自身の影響下に置くため、最高首長は、時に古い称号を復活させ、時に新しい称号を創出するなどして、彼らに称号を与えた。これは住民により、最高首長の「首長国ビジネス」 (*pisniski wehi*) とみなされたが、この時期に名誉称号 (*koanoat*) をはじめとする称号の数が激増した (Fischer 1974)。近代化の過程のなかで、称号が果たす役割は次第に大きくなっていったのである (Petersen 1982: 23)。

2-2. 称号の体系

ポーンペイには、島全体を包括する伝統的な政体はなく、5つの首長国が自律的な政体として機能してきた。首長国の政体は、最高首長のナーンマルキ (*Nahnmarki*) と副最高首長のナーニケン (*Nahnken*) を頂点とする位階序列的な構成を取る。首長国はさらに集落 (*kousapw*) へと分かれる。集落の政体は首長国の政体の縮小版であり、首長 (*soumas en kousapw*) と副首長 (*pelindahl*) を頂点に同様の構成を取っている。

こうした位階序列の公的な指標となるのが、称号である。大抵の成人はひとつないし複数の称号を保持している。称号には大きく2つの種類があり、それは首長国の称号と集落の称号である。前者が最高首長から授与されるのに対し、最高首長から授与される集落の首長位称号を除いて、後者は集落の首長から授与される。また、主として男性が首長から称号を授与される一方、男性の妻は夫に準じた称号を保持しているとされる。

首長国の称号には4系統がある。(1) ナーンマルキの系統、(2) ナーニケンの系統、(3) 名誉称号の系統、(4) 寡婦称号の系統である⁷。集落の称号も同様に4系統に分かれている。各系統の称号は単線的に配列されており、各々に明確な順位がある。死亡や称号の剥奪により空位が生じると、同系統内で下位の称号を保持する者が昇進する。称号授与の際、基本的には1つ下の順位の者が昇進するが、出自という生得的要素や、首長への貢献など個人の功績による獲得的要素も考慮される。こうした称号体系により、住民は互いの順位を知ることができる。以下で述べるように、称号の順位は上位者に対する表敬行為の基礎となる。

6 ポーンペイの政治は、首長制にもとづく慣習的な政治と、選挙にもとづく近代的な政治に二分した。前者は「ポーンペイの側」 (*pali en Pohnpei*)、後者は「外国の側」 (*pali en wai*) とみなされている (清水 1992)。

7 2009年11月の時点において、ウー首長国における各系統の称号保持者数は、ナーンマルキの系統が66人、ナーニケンの系統が63人、名誉称号の系統が56人、寡婦称号の系統が39人となっている。

2-3. 表敬行為にみる称号の順位の顕在化

称号は、祭宴の場面だけではなく、日常生活の中でも重要な役割を果たす。称号の体系は、社会生活において、精緻に発達した複雑な表敬行為として具現化する。

表敬行為においては、系譜や年齢なども一定の指標とされつつ、称号の順位が重要な役割を果たしている。そのため、人びとは互いの順位を気にしながら社会生活を営む。下位者から上位者に対する表敬行為⁸は、挨拶や敬語 (*meing*) といった言語による行為に留まらず、応接行為⁹や訪問時の持参物など、食物の贈与を伴うこともある。この際、贈与する食物の質や量によっても表敬が示される。特に、最高首長や集落の首長に対しては、ヤムイモとパン果の初物献上 (*nohpwei*) がなされ、「礼の祭宴」 (*kamadipw en wahu*) や「集落の祭宴」 (*kamadipw en kousapw*) という形で1年に1度、時には現金も伴う大規模な貢納がなされる。

具体的な祭宴の場では、さらに複雑な表敬行為がみられる。そこでは、挨拶や敬語の使用、祭宴堂 (*nahs*) における座位、シャカオ (*sakau*)¹⁰の給仕、儀礼的に価値が高いとされる豚やシャカオ、ヤムイモなどの貢納、最高首長から称号の順に行われる再分配といった多様なやり方において、称号の序列が参加者に対して明確に示される。

さらに、表敬行為は、新興エリートの職業的地位を称号の体系に回収する形で発展してきた。「政治家」 (*senator*) や「助祭」 (*deacon*) といった英語の役職名は、称号の代わりとして日常生活での呼びかけや、祭宴時の再分配において用いられる。役職名があたかも称号のように用いられることによって、近代化の過程で登場した新興の政治エリートや聖職者の社会的位置についても、称号にもとづく位階序列の中で理解されているのだと言えよう。

このような複雑に発達した表敬行為によって、最高首長の権威が相対化しつつある現在においても、最高首長を頂点とする位階序列が社会生活の様々な場面で意識化される。

3. 最高首長に対する不満と「新しい慣習」の葬儀

ここまで述べてきたように、ポーンペイでは、表敬行為が精緻に発達しており、最高首長を頂点とする位階的な序列が社会生活のあらゆる場面で意識化される。一方で、近代化による権威の相対化を背景として、最高首長に対する不満が人びとの中にある。本章では、葬儀2日目に最高首長を招待するという慣習的实践に焦点を当て、不満の内実言及する。

3-1. 最高首長に対する不満と陰口

8 称号の順位は上位になればなるほど重視される一方で、下位になればなるほど気にも留められなくなる。その意味で、上位の称号保持者に対して、より積極的に表敬行為がなされる傾向にある。

9 ポーンペイにおける応接行為については、清水 (1985) に詳しい。

10 カヴァと呼ばれるコショウ科の植物 (学名: *Piper methysticum*) のことであり、ポーンペイ語でシャカオという。石で叩き潰すことでその根から抽出される樹液は、オセアニアの多くの地域で飲用されている。

筆者は、調査中にウー首長国内の様々な場所を訪れる中で、最高首長に関する不満や陰口を度々耳にした。住民たちは陰で不満を言う時、「ケチ」(*Jehk*)という言葉や「食べ物の顔」(*meseng mwenge*)という言葉をよく使った。後者は、食い意地が張っているという意味であり、食物を分配せずに独占する者を批判する際に使用される。不満は、しばしば再分配物の不均等に関係する。たとえば「私は彼ら(最高首長や副最高首長)が嫌い。彼らは大きなシャカオと豚肉を持ち去ってしまうから」(24歳女性)という不満を筆者は聞いた。

さらに、再分配の仕方や、受け取る財の量や質は、時代を通じて不変的で固定的というわけではなく、個々の最高首長次第である。そのため、再分配は、最高首長がケチであるか、あるいは気前が良いかどうかを判断するひとつの指針となる。ウー首長国における葬儀に限ると、次の2点が最高首長の評価の基準となっている。(1) 最高首長の不在時において、葬儀の参加者に対してだけではなく、最高首長に対しても再分配が行われるかどうか、(2) 最高首長の妻が祭宴に参加するかどうか、である。

まず、現在のウー首長国では、招待した最高首長が葬儀2日目に参加しなかった場合でも、最高首長に対して、大きなシャカオや豚肉の重要な部位(腹部)が献上される。だが、このような献上がなされたのは、過去6代のうち、現在の最高首長も含めた2人に過ぎず(表1参照)、必ずしも一般的ではなかったことがわかる。

次に、住民の不満は、最高首長自身だけではなく、その妻にも及ぶ。最高首長の妻は、最高首長に準じた称号を保持しているとされるため、量や種類の上で特別な物を再分配される。再分配された物を消費する単位は、結局のところ世帯である。世帯としてみると、最高首長は、自身の受領物に加えて、妻の受領物も消費することができる。そのため、葬儀に妻を連れていくことは、最高首長にとって利益になる。したがって、妻が積極的に祭宴に出向き、特別な大きさや種類の再分配物を受け取ると、最高首長は食い意地が張っているとみなされる。妻を頻繁に連れてくる最高首長は、過去6代のうち、半分の3人に過ぎず(表1参照)、その評価にも個人差があることがわかる。

表1 ウー首長国の葬儀2日目における最高首長への再分配のあり方

在位(年)	(1) 不在時における最高首長への再分配	(2) 最高首長の妻の参加頻度
1953~1960	再分配しない	参加することは少ない
1960~1991	再分配しない	参加することは少ない
1991~1993	再分配し、最高首長の屋敷に運ぶ	積極的に参加
1993~1995	再分配しない	積極的に参加
1995~1999	再分配しない	参加することは少ない
1999~現在	再分配し、最高首長の屋敷に運ぶ	積極的に参加

註：筆者の聞き取り調査にもとづく。

以上より、これら2点は、最高首長一般の属性ではなく、あくまでも個々の最高首長の気前の良さを示し、住民からの評価対象となる。結局のところ、不満の直接的な原因は、最高首長による儀礼的貢納物の独占にある。最高首長に対する不満は陰で噂されるに過ぎないが、時に顕在化する。次節では、こうした不満が顕在化した葬儀の事例をみていく。

3-2. 「新しい慣習」の葬儀

本節では、最高首長に対する不満が顕在化した葬儀の事例を提示し、葬儀の主催者遺族がいかなる形で不満を解消しようとしたのかを明らかにしていく。

カトリックの助祭であるパウリーノ¹¹ (86歳男性) は、称号を保持せず、再分配物の物質的な不均等に不満を感じていた。パウリーノはある時、その不満を筆者に漏らした。

〔事例1 パウリーノの不満、2009年9月22日〕

ポナペ (ポンペイの旧称) の習慣はよくない。埋めた後は、何やってるんだ。死んだ人は埋められて見れない。なのに、シャカオ飲んで、豚殺して。よくない。ある人は何も持ってこないで、シャカオ飲んで、豚 (豚肉) もらって帰る。ある人は、(葬儀に貢納物を持参した) 後で、(食べ物) が何もなくなってしまうんだ¹²。

パウリーノの不満は、彼の娘の夫の葬儀において顕在化する。2009年10月27日に実施された葬儀2日目には、パウリーノの主導により、遺族は最高首長を招待しなかった。

〔事例2 「新しい慣習」の葬儀、2009年10月27日〕

10月28日に筆者が葬儀3日目を訪れた際、パウリーノは次のように言った。「昨日のは、ポナペの習慣じゃないんだ。ナンマルキ (最高首長) を呼ばなかったんだ。たまにはこういうやり方もあるんだ。ポナペはこれだけが変わらない。偉い人ばかり大きいのを持っていくから。重たいのを持ってきて、帰るときに何もいない人もいるんだ」。

パウリーノによると、最高首長を意図的に排除した葬儀2日目には、石焼きにされた豚が、ハンドボール程度の大きさに均等に切り分けられ、本来ならば高位称号保持者が受け取るような腹部や脚部などの大きな塊は切り出されなかった¹³。豚肉の分配は称号の順位によらず、ビニール袋に入れて手渡しされた。さらに、シャカオは再分配されることもなく、全てがその場のシャカオ飲みのために用いられた。

11 本稿の事例に登場する人名には全て仮名を用いている。

12 戦前の日本語教育を受けた経験のあるパウリーノは、筆者との会話で流暢な日本語を用いた。

13 本来通りの葬儀における豚肉の再分配においては、大きさだけではなく、部位が重視される。通例であれば、最高首長と副最高首長は腹部 (*kapehd*) の豚肉を受け取り、彼らの妻は脚部 (*peh*) の豚肉を受け取る。

この形式の葬儀は、「新しい慣習」(*tiahk kapw*)とみなされている。「新しい慣習」の葬儀は、最高首長に不満を持っている人物によって主催され、最高首長は葬儀から排除される。「新しい慣習」の葬儀は、再分配における受領物の均等化を目指しており、称号の順位にもとづく再分配に見られるような不均等を解消する試みでもある。

4. 受領物に込められた再分配の魅力

「新しい慣習」の葬儀は、果たして人びとを満足させているのだろうか。実際には、「新しい慣習」の葬儀はあまり実施されない¹⁴。高位称号を持たない多くの人びとは、最高首長に不満を持っていても、受領物を均等化しようとはせず、従来通りの葬儀を選択する。なぜ住民は、称号にもとづく再分配でなければ満足できないのだろうか。

ここで、受領物の物質的な価値に着目したい。「新しい慣習」の葬儀では、相対的に称号の順位が低い者も、物質的な利益を受け取るチャンスを得た。反対に、従来通りの再分配では、称号の順位が低いと、物質的な利益を得る可能性は減少する。ここから、従来通りの再分配が好まれる理由は、単に物質的な価値という点だけから考えることはできない。そこで、本章では、従来通りの葬儀の再分配と「新しい慣習」の再分配を対比しつつ、他の視点から、なぜ従来通りの葬儀が好まれるのかという点に迫りたい。

4-1. 再分配の中心としての最高首長

まず、受領物の価値の源泉、すなわち、受領物が誰からの贈与であるのかという点を考えてみよう。再分配の必要条件である中心性 (*centricity*) という制度的配置 (ポランニー 2003: 374)¹⁵に着目すると、この場合の中心は紛れもなく最高首長である。実際、最高首長の受け取る物は「お召し上がり物」(*koanoat*)、他の多くの参加者が受け取る物は「お召し上がり物からの分け前」(*kepin koanoat*)として範疇化されている。最高首長の受領物はこうした範疇化に加え、その大きさや種類によって、最高首長が首長国の第一位の人物であることを徴づける。すなわち、最高首長が再分配を通して物を受け取ることは、最高位者としての名誉となり、この名誉はさらに分割され「お召し上がり物からの分け前」という形で他の参加者へと再分配される¹⁶。したがって、受領物の価値は、最高位者としての名誉に価値の源泉を持っていると考えることができる。一方、「新しい慣習」の葬儀においては、称号の最高位者が再分配の中心とはならない。さらに、物の集積から再分配までの過程において、複数の人間の手を介しているため、受領物が誰からの贈

14 筆者の調査中に行われた葬儀23例のうち、「新しい慣習」の葬儀は、わずか2例に過ぎなかった。

15 ポランニーは、経済活動の主要な統合形態を、互酬と再分配と(市場)交換の3つに分けている。彼によると、各々の統合形態は、一定の制度的配置を前提とする。再分配が中心性に依存しているのに対して、互酬は対称的組織、交換は市場システムといった一定の制度的配置に規定される(ポランニー 2003: 374-375)。

16 この解釈は、「お召し上がり物からの分け前」が「神聖な食物や聖なる権力の分け前として考えられる」(Keating 1998: 117)というキーティングの見解に従っている。

与であるのかを決定するのは難しく、価値の源泉は曖昧であると考えることができよう。

以上の対比より、従来の葬儀における受領物は、最高首長からの贈物という点に価値を置いており、「新しい慣習」の葬儀における受領物よりも高い価値を持つと言える。

4-2. 相対的順位を表示する受領物

ところが、最高首長に不満を持つ人びとにとっては、受領物が最高首長からの贈与であるという点はさして重要ではないと考えられる。それにもかかわらず、従来通りの葬儀を人びとが選択していることを振り返ると、受領物には、最高首長からの贈物という点以外にも価値があると考えられる。したがって、以下では、再分配の中心としての最高首長に還元されない受領物の価値を考えるために、受領物を実際に享受する人々と受領者との関係、あるいは他の葬儀参加者との関係に着目したい。

それでは、具体的な事例をみてみよう。アワクポウエ集落の首長であるベニート（59歳男性）と、彼の4人の弟は、ウー首長国内のある土地に、家族とともに世帯を構えて居住している。ベニートは、葬儀をはじめとする祭宴に参加する度に、その首長位称号を理由として、シャカオや豚肉を再分配された。世帯の人びとは、豚肉を食べられることや、シャカオ飲みに参加できることを期待しながら、ベニートが祭宴から帰宅するのを待っていた。

ベニートが豚肉を持ち帰ると、それは世帯内で消費されるだけではなく、大きさによっては他の兄弟にも分配された。豚肉はご馳走であり、冷凍庫に貯蔵できるおかげで、少なくとも2日や3日のおかず (*sali*)¹⁷には事欠かなかった。また、ベニートがシャカオを持ち帰ると、彼の屋敷内でシャカオ飲みが行われる。ベニートの世帯の人びとだけではなく、弟たちの世帯の人びとも、このシャカオ飲みの機会を楽しみにしていた。

しかし、世帯に人びとにとって、こうした楽しみがいつも訪れるわけではない。ベニートは、再分配の恩恵に預からないこともある。事例3をみてみよう。

[事例3 肩を落とす集落の首長、2010年2月9日]

ある葬儀では、最高首長をはじめとして高位称号保持者が多く集まり、集落の首長であるベニートよりも称号の順位が高い者が幾人もいた。集積された物の再分配が終わり、彼がこの日手にしたのは、小さなヤムイモ1つだけであった。葬儀で再分配された豚肉は27頭分、シャカオは29本あったが、彼には豚肉もシャカオも再分配されなかった。夕方となり、家に戻った彼は、そのヤムイモを差し出し、娘のリータにやや小さく低い声で「今日は何もない。これだけだ」(*rahnwet sohte mehkot. meh te*)と呟くように言った。持ち帰った物の少なさに、彼は肩を落としていたのであ

17 ポーンベイ語でいう「おかず」とは、動物の肉のことである。具体的には、豚や犬の肉、魚、缶詰などを指している。ベニートの世帯の人びとは、動物の肉がない食事は良くないと口癖のように言っていた。ベニートが祭宴から持ち帰る豚肉は、世帯の人びとの食事を満足させていた。

た。

なぜベニートは落胆したのだろうか。もちろん、世帯の人びとの期待を裏切ったからであるのだが、それはどんな期待であったのだろうか。まず、世帯の人びとにご馳走を持って帰るといふ期待だと考えられる。しかし、世帯の人びとの物的な欲望を満たせなかったことだけが、彼の落ち込んだ理由ではない。むしろ、「いつもと違って」ご馳走を持ち帰らなかったという点に着目すると、葬儀において彼が相対的な低位者であったことに、彼は落胆したのだろう。すなわち、ベニートが受領物を持ち帰るかどうかということは、彼の世帯の人びとや、弟の世帯の人びとに対して、祭宴におけるベニートの相対的な順位を可視化する。世帯の人びとや、弟の世帯の人びとは、ご馳走の入手可能性だけでなく、彼が祭宴の場における相対的な高位者であるという可能性に期待しているのである。

受領物の価値を対比的に考えよう。「新しい慣習」の葬儀では、再分配の順序にも、受領物の大きさにも、受領者の称号が反映されない。そのため、低位者や称号を持たない者も再分配に預かるチャンスを得た。対照的に、従来通りの葬儀では、低位者に再分配がなされる可能性は低い。しかしながら、受領物の質と量は、祭宴における参加者の相対的な順位を表示する。葬儀の参加者がどんな称号を持っているのかについて、あらかじめ予測することはできず、実際の葬儀における受領の可能性は不確実性を帯びる。それゆえ、参加者の構成によっては、低位者であっても相対的に高位者とみなされ、受領のチャンスが生じる。もちろんのこと、こうした受領物は、単なる物質的利益ではなく、称号保持者としての名誉に関わる。葬儀への参加は、人びとにとって名誉をめぐる賭けなのである。

受領物が再分配を通して価値を帯びるのは、最高首長からの贈物という点に加えて、祭宴における相対的な順位を表示するという点においてである。受領物がこうした二重の価値を持つからこそ、最高首長に対する不満が表面化するような状況にあっても、最高首長の招待を伴う従来通りの再分配は、人びとにとって魅力的なものであるのだと言えよう。

5. おわりに

本稿では、近代化の過程において最高首長の権威が相対化されてきたという観点から、最高首長に対する不満が表面化する状況がありつつも、人びとが最高首長を葬儀に招待し、首長制の再生産に寄与してしまうのはなぜかという問いを検討した。葬儀の再分配における交換の形式に着目すると、受領物は、最高首長からの贈物という点だけに価値を持つのではなく、祭宴における相対的な順位を表示する点にも価値を持つ。そのため、個々の最高首長に対する不満によって前者の価値が揺らいだとしても、後者の価値を背景に従来通りの葬儀が選択されるため、首長制は再生産されるのだろう。

但し、この状況は、筆者の調査時点のものに過ぎない。最高首長の権威が揺らいでしまうと、「新しい慣習」の葬儀のように、最高首長に対する不満がさらに顕在化する可能性も否定できない。本稿で扱った不満の行方を、今後さらに見守っていく必要があるだろう。

【謝辞】

本稿は、2010年12月に筑波大学人文社会科学研究所に提出した修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。修士論文の執筆に際し、指導教員の風間計博先生をはじめ、筑波大学の諸先生方からの確かな御指導をいただいた。また、本稿の執筆に際しては、筑波大学の同僚から有益な御指摘と御助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

【参考文献】

Division of Statistics, Department of Economic Affairs

2002 *FSM National Detailed Tables: 2000 FSM Census of Population and Housing*.
Palikir: Federated States of Microensia.

Fischer, John

1974 The Role of the Traditional Chiefs on Ponape in American Period. In Daniel Hughes and Sherwood Lingenfelter (eds.), *Political Development in Micronesia*. Columbus: Ohio State University Press. pp. 166-177.

飯高伸五

2002 「ミクロネシア研究における『植民地状況下の政治意識』」『社会人類学年報』
28:199-217。

Keating, Elizabeth

1998 *Power Sharing: Language, Rank, Gender and Social Space in Pohnpei, Micronesia*. Oxford: Oxford University Press.

Lindstrom, Lamont and Geoffrey White

1997 Introduction: Chiefs Today. In Geoffrey White and Lamont Lindstrom (eds.), *Chiefs Today: Traditional Pacific Leadership and the Postcolonial State*. California: Stanford University Press. pp. 1-18.

Marcus, George

1989 Chieftainship. In Alan Howard and Robert Borofsky (eds.), *Development in Polynesian Ethnology*. Honolulu: University of Hawaii Press. pp. 175-209.

中山和芳

1986 「ポナペ島社会における伝統的リーダーシップの変容の予備的考察」馬淵東一先生古稀記念論文集編集委員会編『社会人類学の諸問題』第一書房、pp. 59-84。

1994 「首長制からエスニック・グループへ——ミクロネシア連邦ポーンペイ島民のアイデンティティ」黒田悦子編『民族の出会いのかたち』朝日新聞社、pp. 85-108。

則竹賢

2000 「植民地支配下におけるミクロネシア社会の変容——ポーンペイ島とヤップ島の事例より」『民族学研究』65(2):168-189。

Petersen, Glenn

1982 *One Man Cannot Rule a Thousand: Fission in Ponapean Chiefdom*. Ann Arbor:
The University of Michigan Press.

ポランニー、カール

2003(1957) 「制度化された過程としての経済」石井溥訳『経済の文明史』筑摩書房、
pp. 361-413。

Rehg, Kenneth and Damian Sohl

1979 *Ponapean-English Dictionary*. PALI Language Texts: Micronesia. Honolulu:
University of Hawaii Press.

清水昭俊

1985 「出会いと政治——東カロリン諸島ポーンペイにおける応接行為の意味分析」『文化人類学』1:179-210、アカデミア出版会。

1989 「ミクロネシアの首長制」『国立民族学博物館研究報告・別冊』6:119-139。

1992 「ミクロネシア連邦における近代化と伝統」畑博行編『南太平洋諸国の法と社会』有信堂高文社、pp.133-150。

1995 「名誉のハイアラーキー——ポーンペイの首長制」清水昭俊編『洗練と粗野——社会を律する価値』東京大学出版会、pp. 41-55。

1999 「慣習的土地制度の外延——ミクロネシアの比較事例」杉島敬志編『土地所有の政治史——人類学的視点』風響社、pp.409-428。

山本真鳥

1989 「都市化の中の首長システム——西サモアにおける首長称号保持者間の役割分化」『国立民族学博物館研究報告・別冊』6:301-329。